

称号及び氏名	博士（言語文化学） 魏 峰皓
学位授与の日付	平成23年3月31日
論文名	上代日本語の書記資料にみる敬語の文法化
論文審査委員	主査 野田 尚史
	副査 張 麟声
	副査 村田 右富実
	副査 乾 善彦

## 論文要旨

### 1. 本研究の目的と方法

本研究は上代日本語の書記資料の散文資料を中心に取り扱い、「賜」「給」「奉」「坐」「所」の敬語（補）助動詞化のプロセスとメカニズムを、漢籍資料における用法と比較することを通して考察するものである。この考察にあたって、本研究は文法化の視点から考える、並びに漢籍資料と比較するという二つの方法を用いることとした。

文法化の研究はある語の内容語から機能語へと変化していくプロセスとメカニズムを考察するものである。また、通時的に起こる文法化の結果は共時層における用法のバラエティにも反映しているため、通時的と共時的という二つのアプローチがある。本研究は文法化の共時的アプローチを用いて、「賜」「給」「奉」「坐」「所」が『古事記』、『日本書紀』、正倉院文書、『風土記』、宣命という上代日本語の散文資料における用法を漢籍資料と比較した上で、敬語（補）助動詞化のプロセスとメカニズムを明らかにした。

また、本研究は上代日本語の散文資料を取り扱うが、その中に漢文体及び変体漢文体のものがあ、漢籍資料と類似しているところがあるため、両者を比較することとした。

本研究は以上の二つの方法を用いて、「賜」「給」「奉」「坐」「所」の敬語（補）助動詞化のプロセスとメカニズムを解明した。

## 2. 本研究の構成

本研究は「はじめに」で本研究の目的と方法を説明した後、第1章で「賜」「給」、第2章で「奉」、第3章で「坐」、第4章で「所」の敬語（補）助動詞化のプロセスとメカニズムを文法化の視点によって考察した。また漢籍資料における用法と比較することにより、日本語の敬語の文法化成立と漢語表現との関わりを明確に位置付けることが出来た。「おわりに」でその結論及び今後の課題を述べた。

## 3. 各章の概要

### 3. 1. 「賜」「給」の敬語補助動詞化のプロセスとメカニズム

第1章では「賜」「給」の上代日本語の散文資料及び漢籍資料における用法を考察した。「賜」「給」の敬語補助動詞化のプロセスとメカニズムは以下のように考えられる。

「賜」は敬意を含み、上から下へという方向性を持つ授受動詞である。授受動詞以外の一般他動詞と接続し、そして目的語、特に授与物が省略された構文環境において、一般他動詞と「賜」の間に再分析が起こり、「賜」は具体的授受動作の代わりに上から下への方向性だけがプロファイルされた。「賜」のこの用法は上代日本語の散文資料と漢籍資料の両方に見られる。上代日本語は漢籍資料の再分析まで文法化した「賜」の用法を受容した上で、授受の受け手が話し手によって内在化、同一視化されたという主観化が起き、さらに、「賜」と接続する動詞が一般他動詞から自動詞まで類推するというメカニズムによって、敬語補助動詞「賜」が成立した。

一方、「給」は本来、上代日本語も漢籍資料と同様に敬意を含まない授受動詞である。ところが「賜」と意味用法が類似しており、そして「賜」と同訓のた

め、敬語補助動詞として成立した。宣命の場合が示しているように、「給」は感情動詞と接続するという漢籍資料に見ない用法も持つようになり、「賜」と待遇程度の差を表すところで使い分けられているということである。

### 3. 2. 「奉」の敬語補助動詞化のプロセスとメカニズム

第2章では「奉」の上代日本語の散文資料及び漢籍資料における用法を考察した。「奉」の敬語補助動詞化のプロセスとメカニズムは以下のように考えられる。

「奉」は「ささげもつ」という本義から「献上する」「お仕えする」「まつる」という意味になるなど、内容語レベルにおいてかなり意味拡張が起こった。それにより、接続用法も多岐にわたる。大きく分けると類義結合と非類義結合がある。類義結合の場合、「奉」は接続動詞と共に、「奉」の「ささげもつ」「お仕えする」「まつる」という動詞の意味のいずれかを表すため、動詞と「奉」の順番は前後しても、「奉」は文法化していない。それに対して、非類義結合の場合、

「奉」と動詞の順番は前後の二種類があるが、どちらも「奉」の目的語が文脈によって省略された構文環境において、「奉」と動詞の間に再分析が起きた。「奉」+動詞という用法において、「奉」は接頭辞化（漢籍においては副詞化）、動詞+「奉」という用法において、「奉」は補助動詞化という二つの文法化の方向が並行に現れた。但し、そのあとに起きる類推の段階、つまり「奉」と接続する動詞が一般他動詞から言説動詞、ないし感情・心理動詞まで類推していくということは「奉」+動詞という用法のみ、そして漢籍資料と『日本書紀』にのみ見られる。それは、「奉」は最終的には漢籍資料の副詞化した用法より、さらに進んで接頭辞化していったのであり、補助動詞化はまだ完全には起きていないことを示唆している。「奉」の完全な補助動詞化は漢籍資料において副詞化した「奉」の用法を受容した上で訓読によって成立したのではないかと考えられる。

### 3. 3. 「坐」の敬語補助動詞化のプロセスとメカニズム

第3章では「坐」の上代日本語の散文資料及び漢籍資料における用法を考察

した。「坐」の敬語補助動詞化のプロセスとメカニズムは以下のように考えられる。

「坐」はもともと敬意を持たない、主体の空間存在を表す動詞である。移動動詞が「坐」と接続し、そのあとの場所名詞が省略された構文環境において、移動動詞と「坐」の間に再分析が起こり、「坐」は空間の存在から結果の存続相という時間的概念に変わった。「坐」のこの用法は上代日本語の散文資料と漢籍資料の両方に見られる。上代日本語は漢籍資料の再分析まで文法化した「坐」の用法を受容した上で、さらに上接動詞が一般自動詞（ないし他動詞）まで類推することにより、持続相を表すアスペクトマーカ―「坐」が成立した。そのあと、この持続相を表すアスペクト形式、動詞＋「坐」という表現は、メトニミーというメカニズム、つまりある状態の形成で動作を表現するという事により、婉曲的な動作の捉え方となって、動詞そのものによる表現と比べると有標的な表現となり、敬語表現にも応用できるようになった。「坐」はこのように敬語補助動詞となった。

### 3. 4. 「所」の敬語助動詞化のプロセスとメカニズム

第4章では「所」の上代日本語の散文資料及び漢籍資料における用法を考察した。「所」の敬語助動詞化のプロセスとメカニズムは以下のように考えられる。

「所」はまず場所名詞から関係代名詞の連体修飾節の用法に拡張した上で、動作主の省略、及び修飾された名詞句の前置という構文環境において、「所」は動詞との間に再分析が起こり、そして動詞の意味構造とも関わる中、受身・自発などの意味が付加された。「所」のこの用法は上代日本語の散文資料と漢籍資料の両方に見られる。上代日本語は漢籍資料の再分析まで文法化した「所」の用法を受容した上で、さらに「所」と動詞からなっている動詞句が述語位置に変わることによって、受身・自発の助動詞「所」が成立した。そのあと、この受身・自発を表す形式、「所」＋動詞という表現はメトニミーというメカニズム、つまり動作を場所化することで動作を表現するという事により、婉曲的な動

作の捉え方となって、動詞そのものによる表現と比べると有標的な表現となり、敬語表現にも応用できるようになった。「所」はこのように敬語助動詞となった。

#### 4. 本研究の結論

以上の結果、上代日本語の散文資料における敬語の文法化を二つのパターンに分けることができる。

パターン1 敬意を含む動詞「賜」「奉」：授受動詞>敬語補助動詞

パターン2 敬意を含まない動詞「給」：授受動詞>敬語補助動詞

「坐」：存在動詞>敬語補助動詞

「所」：場所名詞>敬語助動詞

この二つのパターンの敬語(補)助動詞化のプロセスとメカニズムは異なる。パターン1の場合、すでに敬語表現であったため、敬語補助動詞化はすなわちこの敬語表現はどのように文法形式化したかという問題にほかならない。パターン2の場合、もともと敬語動詞ではないため、動詞としての性質による文法形式化、つまり(補)助動詞化とこの文法形式の敬語表現化という二段階のステップが必要である。敬語表現化の段階においては、「坐」「所」のようにメトニミーによるものもあれば、「給」のように訓によるものもあり、日本語独自の特徴を反映している。

また、日本語の敬語(補)助動詞の成立には漢語表現からの受容も関わっている。つまり漢語表現には「賜」「給」「奉」「坐」「所」の敬語(補)助動詞への文法化を誘発する要素がある。但し、漢語表現からの受容はあくまでも敬語の文法化の発生を促す動機づけであり、敬語の文法化はやはり日本語の内部のメカニズムによるものである。

## 学位論文審査結果の要旨

### 1. 本論文の意義

本論文は、古代語漢字文献における敬語補助動詞の成立を、文法化の観点と漢文（中国語）との対照から原理的に説明するものである。従来、日本語の変遷という観点からのみ考えられてきた敬語補助動詞について、書記資料という資料性を問題として、訓を一時保留にした上で、文法化という言語理論を導入することにより、より理論的な記述を行ったところに独自性がある。さらに、漢文の文法化と対照させることにより、日本における書きことばとしての漢文の変遷という観点から、敬語補助動詞の成立を記述したところに大きな意義がある。

### 2. 本論文の総合評価

本論文は、研究テーマと方法の独自性、データの収集、記述方法、研究結果のいずれにおいても次のように優れており、高く評価できる。

- (1) 研究テーマと方法の独自性：従来、日本語の史的展開として問題とされてきた敬語補助動詞を、漢字による書記資料という観点から、対象を漢文との関係に絞って言語学の理論的な研究方法である「文法化」という観点から見直されている。今までとは異なる問題設定と方法が採用されている点が評価できる。
- (2) データの収集：日本側の文献として日本書紀、古事記、風土記、正倉院文書、宣命を、中国側の文献として漢籍と仏典を調査対象としており、主要な対象とデータは十分充足している。その中から採集された用例を、一例一例丹念に検討している。
- (3) 記述方法：すべての文献のすべての語について精査し、丁寧な記述を行っている。
- (4) 研究結果：従来の研究では、日本語の変遷という観点でしか記述されてこなかった敬語補助動詞の成立を漢字文献の変遷として記述したことは、近年の日本語書記の研究に従った新しい観点である。また、文法化という言語変化の理論を導入したことは、従来の国語学では行われなかったことであり、日本語の側からの説明も含めて新しい見解を提示している。

### 3. 本論文の評価の詳細

#### 3.1 「はじめに」に対する評価

「はじめに」では、本論の目的と方法が示されている。従来、日本語の史的展開として問題とされてきた敬語補助動詞を、漢字による書記資料という観点から、対象を漢文との関係に絞って言語学の理論的な研究方法である「文法化」という観点から見直すことによって、今までとは異なる問題設定と方法とが採用されている点が評価できる。

#### 3.2 「第1章 「賜」「給」の文法化」に対する評価

第1章では、「たまふ」に相当する「賜」「給」の文法化のプロセスとメカニズムが明らかにされている。具体的な授受関係を備えた構文から、目的語、特に授与物が省略される構文環境において再分析がおこなわれ、上下関係の方向性だけがプロファイルされ、授受

の受け手が話し手によって内在化、同一視化されるという「主観化」が起こり、それが「類推」によって一般他動詞から自動詞にまで用法の拡大が起こることで、敬語補助動詞としての「賜」が成立したとする。さらに「給」については、「賜」と訓を共有することによって「賜」と同様の文法化が起こり、待遇の程度によって使い分けが行われたとする。「たまふ」の成立と展開に対する従来の説を「文法化」という観点から再解釈したところに本論の独自性が認められる。

### 3.3 「第2章 「奉」の文法化」に対する評価

第2章では、「奉」の文法化が扱われている。従来の研究では「奉一」と「一奉」の字順の違いが焦点となっていたのに対して、仏典等にはすでに文法化の一手手前まで進んだ副詞用法があること指摘し、それが類推によって文法化を押し進めたことを提起している。漢籍資料の中でも仏典等の白話資料の特性に注目した点に独自性があり、その結論はおおむね説得的であると認められる。

### 3.4 「第3章 「坐」の文法化」に対する評価

第3章では、「坐」の文法化が扱われている。「坐」は「賜」や「奉」がその動詞自体に待遇性を持つとは異なり、待遇性を持たない動詞が文法化したものである。本論では、古事記において「坐」がアスペクト性を持つことに注目して、まず持続相を持つアスペクトマーカ―としての文法化が起こり、そのあとメトニミーというメカニズムによって婉曲的な動作のとらえ方が生じた結果、動詞そのままによる表現よりも有標的な表現として待遇を表すようになったとする。従来明確でなかったもともと待遇性を持たない動詞の敬語化について一定の解釈を示しえたところに本論の意義があり、評価できる。

### 3.5 「第4章 「所」の文法化」に対する評価

第4章では、「所」の文法化が扱われている。「所」も「坐」と同様、本来待遇性を持たない語に敬語化が生じたものである。本論文では、本来名詞あるいは形式名詞であった「所」に漢籍においてまず受身・自発の文法化が生じ、その再分析の結果、日本語に助動詞としての文法化が起こり、さらにメトニミーというメカニズムによって婉曲的な表現を生み出し、それが「坐」と同様の再分析で敬語補助動詞化したとする。前章同様、待遇性を持たない語の文法化であるが、そのメカニズムには類似点と相違点があり、その差を明確にしたところに説得力がある。

### 3.6 「おわりに」に対する評価

「おわりに」では、まとめと今後の課題が示されている。第1章から第4章で述べられた敬語の文法化について、本来待遇性を持つものの文法化と、本来待遇性を持たないものの文法化の2つのパターンがあったことをまず指摘する。その上で、待遇性を持つものは、上下関係の方向性のみがプロファイルされる形で文法化が生じ、そうでないものは、まず別の文法化が生じた上で、それが有標性を持つ表現形式としてメトニミー、比喻性によって文法化したことを指摘する。従来、言われてこなかった文法化のメカニズムを整理した

ところに本論のもっとも大きな功績がある。

#### **4. 今後の課題**

今後は、言語学的方法論を持つ本研究と従来の日本語研究との間の溝を埋めるための努力が期待される。そのことによってさらに文法化という方法論の有効性が確認され、理論的な整備も進むことが期待される。

#### **5. 人間社会学研究科博士論文審査基準による評価**

「人間社会学研究科博士論文審査基準」の以下の5項目のいずれについても、本論文は十分該当すると認められる。

- 1) 研究テーマが絞り込まれている。
- 2) 研究の方法論が明確である。
- 3) 先行研究についての調査が十分に行われ、その知見が踏まえられている。
- 4) 結論に至る議論の展開が十分な論拠に支えられ、かつ論理的である。
- 5) 当該分野の学術研究の進展に貢献する、独創性を備えた内容である。

#### **6. 審査委員会の結論**

本審査委員会は、全員一致で、申請者に対して博士（言語文化学）の学位を授与することが適当であるとの結論に達した。